御柱祭（おんばしらさい）２０１６・４・８

諏訪地方６市町村（＊１）２１万人の氏子がこぞって参加する天下の大祭である。

御柱祭の前に諏訪という土地について考える。各種の自然災害から国土を守る事業を砂防と呼び、愛知県砂防協会会長を務めた経験は日本という国の宿命を知る上に勉強になった。国土自体が砂防列島であり地震・火山噴火・津波・台風・集中豪雨など世界一の自然災害総合デパートである。日本列島はユーラシア・北アメリカ・太平洋・フィリピンの４プレートが十文字に交差した位置にあり、それ故に自然界の循環が極めて変動的・流動的なダイナミズムを特徴とする。また列島の東西軸は中央構造体、南北軸はフォサマグマの断層帯が走り、その交差点が実は諏訪である。この岩盤にある事実を知っただけで御柱祭の激烈さと自然を畏敬する強い信仰心と多様な物語性のよって来るものが理解できよう。

諏訪大社のご祭神建御名方神（たてみなかたのかみ）は記・紀神話に出てくる出雲の国譲りの結果諏訪に逃れてきた神である。このタテミナカタノ神が、諏訪の先住民族の信仰ミシャクジ神（＊２）と習合し、諏訪地方独特の信仰心の深さとその実践としての祭が展開されるようになり、御柱祭の起源となった。

これだけスケールの大きい祭の全貌を捉えることは、この地に住んでいない者には不可能に近い。私は４月８日、下社山出しの木落坂、３日間の初日だけを観に行った。

御柱祭の概観を述べる。正式名称は諏訪大社の「式年造営御柱祭」、６年に一度（寅と申の歳）の遷宮祭である。諏訪大社は本宮と前宮の上社と春宮と秋宮の下社の４社からなる。この４社がそれぞれ４本づつ合計１６本のモミの大木（樹齢２００年・６ｔ～８ｔ）を山から切り出し、山を下り（木落し）、川を渡り、道中すべて氏子達の人力で運び（里曳き）、４神社の四隅に建てる（建御柱）祭である。何せ柱に「御」をつけるのだから柱そのものが神であり神は大木に宿るという縄文の霊魂の原点が圧倒的な迫力で漲（みなぎ）る。

木落しだ。坂の下に春うららと渓流が流れ、辺りの川原が観光客の場所となる。坂は最大傾斜３５度、距離１００ｍ。笹が茂り止まりにくく落ちるスピードが上昇する仕掛け。山から切り出した御柱が氏子の大集団に曳かれ坂に到着。巨大なモミの頭が坂の上にせり出す。長々と儀式が始まる。木遣り唄の高音が山間の青空に抜けていく。ヨイショヨイショの大歓声、御幣の乱舞、笛の音、ラッパを吹き鳴らす。種々のさんざめきが渦となって見る側も今か今かと集中力が極点に達した瞬間、御柱を繋ぎ止める綱が斧で断ち切られ、命知らず達が跨った御柱は一気に坂を落ちる。氏子の集団が一斉に御柱に寄って来る。静から動へ一瞬の間だ。相撲の仕切りから立ち合いの瞬間と重なった。

山出しと里曳きを経て神社へ着いた御柱は最後に建御柱を迎えるが、今年の建御柱で事故が起き２名の死者が出た。それでもこの祭は続く。我々はなぜ祭に熱中するのか？人間が生きるということや歴史の継続性の意味を静かに暗示する深淵をのぞいた気がする。

御柱祭は６年に一度であるが「諏訪大社の年中神事」を見ると氏子たちは年がら年中祭りをやっている。元旦の蛙狩り、２月御神渡拝観と注進、６月茅の輪くぐり、８月御射山祭、９月相撲、１１月新嘗祭・大嘗祭などは代表的な祭だが、毎月祭だらけである。

郷土史家宮坂光昭氏の「御柱と年中行事」は、御柱を中心とする諏訪の祭は上からの命令や神社の指示ではなく氏子の側から行う“水平構造”と指摘する。特に明治の国家神道が推進した祭政一致の“垂直構造”の祭と対比した視座として興味深いし、この水平構造こそ諏訪には未だ縄文世界が生きている所以なのであろう。

６年先はこの気宇壮大な御柱祭ワールドのフィニシュ「建御柱」を見物したい。　　写真：デン真

（＊１）諏訪地方６市町村　岡谷市・諏訪市・茅野市・下諏訪町・富士見町・原村

（＊２）ミシャクジ神　石神・道祖神　中沢新一著「精霊の王」に詳しい